



關文餘錄

倣前湯茂元補註
乾

15
1250
1



15
1250
1-2

門 47
興 1629
卷 1

門 45
興 1250
卷 1

明治廿七年
十一月廿五日



剛散附録中りの原中と致す事と世に於ては
往後生を方より往後ありて往後と自ら覺悟して一
往後と云はれり一日福を往後と云ふ事と世に於ては
往後と云はれり往後と云ふ事と世に於ては
往後と云はれり往後と云ふ事と世に於ては
往後と云はれり往後と云ふ事と世に於ては
往後と云はれり往後と云ふ事と世に於ては
往後と云はれり往後と云ふ事と世に於ては
往後と云はれり往後と云ふ事と世に於ては
往後と云はれり往後と云ふ事と世に於ては
往後と云はれり往後と云ふ事と世に於ては

安信作

題閑散錄錄贈
茲野南川士長
茲城一箇風派
客入是男兒南

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

八生子建文立車
推繡帟過之豪
飲似長鯨春深
沈醉夢為客所

靜孤嘆苦月明
不其及由來多嘆
日錄傳翰苑著
書名

安邦紀元 至日

多厚 藩儒學教授

定水龍公羨

閑散餘錄序

可以無也。每亦何損乎己為。不可以無也。
引則有。若平人為。善。而可以。也者。世不常
有。而可以。也者。此。屬。遠。出。而。葵。集。
富。天下之事。大抵。如。斯。者。不。憤。乎。辟。之。
著作。乃。亦。然。哉。近。時。浮。極。之。後。切。黃。赤。跡。

唯名之趨。今日著一書。明日著一書。充棟
汗牛。要之非在上架。而在舟中。行舟之當
無益乎人。適足以自污。其將謂之何。為吏不
可以無也。考絕無而稱。有如閑散錄。錄是
也。士長氏起自賦詠中。非吾所見師友訓
導。其攻學文辭。皆出于資性。遂能玉成其

業。其禍其困。任職久學。於是乎其所著。皆
元和以來。巨儒碩匠。之語事跡。採摭畧備。
倘我邦。每儒林文藝。之傳。則已為吾志。
乎此。亦必取激。此書是不可以無也。非
耶。殆而所以名其書。曰。友以新編。消閑
忘散。於學也。業固錄。再士長氏。吾以可

以無也者自期而人反以為不可無也者
較法近時浮怪云徒自夸說以方其心
年也吾而人視以為可以無也其得失
果少何事哉噫我先矣馬班之業非所
可希也唯同士長氏嬰心後學乃保此說
贈云以贊成其業云尔

安永癸巳暮二月

北海 江邨 倭撰

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 以、者、有、自、期、而、人、及、以、者、不、可、以、本、心、
教、法、之、時、海、域、不、定、自、心、之、以、也、
無、世、亦、中、人、以、以、可、以、也、
茶、少、何、自、本、心、也、
可、者、也、
安、亦、也、

閑教修録

○ 予嘗々々高古す。十年、件、傳書
の暇、其、修、録、之、事、を、行、は、し、て、後、に、
予、考、訂、し、乃、以、此、既、に、
よ、は、し、る、公、の、心、を、
と、授、け、て、予、の、心、を、
報、答、を、授、け、て、刊、せ、し、
中、の、難、し、き、語、を、
版、入、意、を、解、し、

巻くすあをらあ〜 周教伝録〜ささく後漢下
法をり 旅の便〜ささく後漢〜ささく編
者願多事 意とささく〜ささくすあをら
あをら〜ささく〜ささく〜ささく〜ささく
○ 近年 梓りのささく 教文伝録あり 信村 教文伝録あり
は名所里師資の相承を言ひの二ささく 梓り
物〜ささく〜ささく〜ささく〜ささく〜ささく
○ 梓りに 略す

○ 深中に 芥 但来のし事と 伝さるる事 梓りあり
昭代の 大儒ささく〜ささく〜ささく〜ささく〜ささく
ささくの中に におの事 文集〜ささく〜ささく〜ささく
世系 經歷ささく〜ささく〜ささく〜ささく〜ささく
周南ささくささくの 伝さるる事 梓り〜ささく〜ささく
極果 文集ささく〜ささく〜ささく〜ささく〜ささく

○ 深中 治身心〜ささく〜ささく〜ささく〜ささく〜ささく
梓り 同〜ささく〜ささく〜ささく〜ささく〜ささく
人あり 一代の 史と 傳〜ささく〜ささく〜ささく〜ささく
ささく〜ささく〜ささく〜ささく〜ささく〜ささく

天和七年庚寅冬十月

閑散餘録卷之三上

伊勢 南川維遷士長 著

- 毛利貞祐の著書籍の價値抄と比のものと書物と
- 又舌耕とて業とせりとのゆゑはのちのちのまじり
- の記述の毛利貞祐の計席講銀とてり價値抄と
- 著書の標註と著書のとてり字致言の業とてり
- 物とてり十倍せり
- 字致言由の記述昌とのつてり周防の山石圖
- 表列の記述はてり人より細事とてり山石圖の記述

此之令と云はれども其の意又云はれたるは
しと事にはり物とも古言の唐文のいふは
そのまゝなりと云はれり。論語の皇侃の疏より下
野の皇利の字を授けり云はせり。まゝとて唐文
ひるゝもの古文孝経を引く國を治るる者國
しく唐文の字ありと云はれり。ゆに王統の師
唐文の字ありと云はれり。其の字は唐文の
語なりと云はれり。此の字は唐文の字なり
ひるゝものなりと云はれり。其の字は唐文の
又云はれり。標本の字も唐文の字なり。因りて
寡の字一と云はれり。唯りてす

^註井田曰逸書者百篇今尚存者之句 政師永叙
^註中の句一と云はれり。其の字は唐文の字なり
と云はれり。其の字は唐文の字なり

○ 世平曰日本刀歌はるる一と云はれり。其の字は唐文の字なり
其の字は唐文の字なりと云はれり。其の字は唐文の字なり
其の字は唐文の字なりと云はれり。其の字は唐文の字なり
其の字は唐文の字なりと云はれり。其の字は唐文の字なり

田中記の八幡堂障子の八幡殿の御姿も一々相見
とも唐土の八幡殿をとりて障子の祖武正の御姿
持取の御姿の御姿も一々相見も一々相見も一々相見
古くは朝野一々相見も一々相見も一々相見も一々相見
小幡障の御姿も一々相見も一々相見も一々相見も一々相見
此の人ありては唐土の彭城の劉向ありては或は彭
城の移りては唐土の彭城の田中ありては或は彭
ありては或は彭城の魏氏ありては或は彭

井原曰ふ傳曰考も一々相見も一々相見も一々相見も一々相見

用たるは或は唐土の彭城の劉向ありては或は彭
城の移りては唐土の彭城の田中ありては或は彭
ありては或は彭城の魏氏ありては或は彭

勝桓と唐土の彭城の劉向ありては或は彭
城の移りては唐土の彭城の田中ありては或は彭
ありては或は彭城の魏氏ありては或は彭
唐土の彭城の劉向ありては或は彭
城の移りては唐土の彭城の田中ありては或は彭
ありては或は彭城の魏氏ありては或は彭

非庸氏の如くはるるをみるは

○ 傳へしは佛を好むる人唐宗廟を本尊とす一宮に古尊古
たを唐のそま者多し一佛を好むるにありとありとも
年以本佛を好むるに好むるにありとも南唐陳太師の
玄光權法道 善後の道善法系の大湖文集 加判の善法文集
金剛の修めを
以て善と著す ありし傳へしは佛を好むるを善法徳の徳因なり
河つてなり二二の道なり佛を好むるに好むるにありとも
山御周宗ありかたなり一宮にありとも善法と徳法と
大方佛ありとも佛を好むるに好むるにありとも

○ 傳傳と田舎屋とくくハ皇流と義疏の道なり一ハ
りなり一皇流の道なり一皇流の道なり一皇流の道なり
とくくハ義疏の道なり一皇流の道なり一皇流の道なり

牛曆曰くはるるは唐宗廟を本尊とす

古文書にもあるは唐宗廟を本尊とす一宮に古尊古
たの道のふりハ二宮ありとも皇流の道なり一ハ
一宮にありとも皇流の道なり一宮にありとも皇流の道なり
も鄭氏の善法と王聖滄に好むるにありとも一宮に
と鄭氏とありとも一宮にありとも皇流の道なり

とこの人の「*...*」
或同前より引く「*...*」
大正の事と云ふは相違なく大正の事と云ふ

此の人の文章は、*...*

此の人の文章は、*...*

此の人の文章は、*...*

此の人の文章は、*...*

○ 此の人の文章は、*...*

此の人の文章は、*...*

此の人の文章は、*...*

此の人の文章は、*...*

○ 此の人の文章は、*...*

此の人の文章は、*...*

此の人の文章は、*...*

○ 此の人の文章は、*...*

此の人の文章は、*...*

此の人の文章は、*...*

此の人の文章は、*...*

此の人の文章は、*...*

○ 此の人の文章は、*...*

此後集の筆蹟をみるに

○ 此冊は集巻九の物産採集の筆蹟に似て、向井一平

豊田先
生

の筆蹟に似て、箱に「*Shōta*」とある

も、此の筆蹟に似て、著者として、大正十一年刊の

白鳥の韓入の筆蹟に似て、留和集の筆蹟に似て

世に知られたる此の筆蹟の影射に似て、純正の筆蹟

の筆蹟に似て、本集の筆蹟に似て、物産採

集の筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て

庶物採集二十巻の筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て

この筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て

この筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て

この筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て

この筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て

この筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て

この筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て

この筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て

この筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て

この筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て、牧舎の筆蹟に似て

心遣くつ書くより言付物なきに玄鑑のるるありけり
記すも此の如くありけり
此世を死より生るるの道なきと傳へるる事なきに
中山の御少の青安なるるに慶應永同年中の事なり
法務とありせり
一 秘別ありけり
くろく

閑教伝録終

